

歴史とは「人」の力

亀井大樹 / 同志社大学商学部 助教

英語の「ヒストリー」の語源はギリシャ語の「ヒストリエ」とされる。「ヒストリエ」は古代ギリシャの著述家であるヘロドトスが「調査・探究」という意味でもちいたのが最古だとされている。ヘロドトスは、いまだ「歴史」というジャンルや概念が確立されていない中で、ペルシア戦争の原因を実際に現地へ視察し、当事者から聞き取りをするなど「調査・探究」したのであった(桜井万里子(2023)『歴史学の始まりーヘロドトスとトゥキュディデスー』講談社学術文庫、21-22頁)。後年アリストテレスやキケロらによってヘロドトスは歴史家と評価され、「歴史の父」と称されるようになった。つまり歴史叙述のはじまりは「調査・探究」であるといえるのだ。

奇しくも経済経営研究所の前身は彦根高等商業学校「調査課」であった。『滋賀大学史』には「調査課」の業務内容は「同課の仕事は初期、主として資料の収集・整理・調査の報告等であった」と書かれている(滋賀大学史編集委員会編(1989)『滋賀大学史』滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会、386頁)。つまり「調査課」は「ヒストリエ＝調査・探究」の意味である「調査報告」も、歴史学の基礎である「資料の収集・整理」もおこなっていて、まさに設立当初から歴史学にゆかりの深い部門であったといえよう。

かくて歴史学にゆかりの深い経済経営研究所に私が関わりをもったのは学部3年のときであったと思う。2010年頃の経済経営研究所は附属図書館の2階にあった。カウンターには機械彫刻用標準書体の「経済経営研究所 カウンター」というプレート板が置かれていた。カウンター横の本棚には当時はA5版の黄色い表紙だった『彦根論叢』が並べてあった。女性の職員さんが手元の書類やパソコンに向かって黙々と作業し、時折談笑している姿が図書館の閲覧室から見えた。新入生だった私は「彼女らは一体どのような仕事をしているのか」と不思議だった。「経済経営研究所」が単に「研究所」と呼ばれていることも知らなかった。

ところで私は幼いころから研究者になることが夢で、入学当初から研究職に就くことを希望していた。3年生からはじまる専門演習で経済史を専門とする

筒井正夫先生のゼミの門を叩き、以降歴史学の徒となった。筒井ゼミでは「論文にいかなる資料をつかったのか」、「資料の意義はいかなるものか」といった基礎的な知識とともに、「資料を含むモノを通して歴史を語り継いでいく大切さ」を習った。そして滋賀大学で近現代資料を保存管理しているのが研究所であると筒井先生に教えられた。同じころに研究所のスタッフを紹介して頂いた。研究所のスタッフは静かに歴史を愛していらっしやって、守り伝えていくという強い意志を持たれているというのが私の最初的心証であった。

筒井ゼミに入った私は明治期に地元大阪にあった兼営織布企業の金巾製織会社を学部卒業論文のテーマとした。執筆のために研究所の資料を「調査・探究」した。「調査・探究」は成果に結実し、『近江と人』という雑誌に金巾製織の経営陣が書いた当時を回顧するエッセイを見つかるにいたった。短編ではあったが、先行研究には触れられていない記述で、天にも昇る心地であった。約100年前に発刊された資料に巡り会えたのは奇跡ではない。それは研究所の歴代スタッフが資料を守り伝えてきた証であり、加えて「人」の力ではないかと私は院生時代の経験から思っていたようにもなった。

学部卒業後に私は研究者となるべく滋賀大学大学院に入学した。研究所で夜間アルバイトをするようになってからは、研究所のスタッフと親しくなった。研究者志望の院生のすさんだ気持ちをほぐしてくれたのは他ならぬ研究所のスタッフとの雑談であった。江竜美子さん、宮本啓子さん、西埜知佐さん、川村ゆかりさん、加えてリスク研から異動してきた山崎真理さん。彼女らとペットの猫などたわいもない話題で盛り上がった。彼女らは「黙々と仕事に耽り、時折談笑をする」職員ではなかったのだ。資料を保存管理し、「調査・探究」する研究者の便宜をはかり、時には研究者の気持ちをほぐすために雑談に付き合う。そうした仕事をこなすエキスパートだったのだ。彼女らがいなければ研究所は成り立たないのである。

経済経営研究所100周年おめでとうございます。